



アルゼンチン通信



第22号 2026年05月31日発行(毎月月末発行予定)

JICAシニア海外協力隊2024年1次隊:経営管理

玉東町グローバル2024年03月卒業生

鈴木功二 サンティアゴ・デル・エステロ在住

・5月のアルゼンチンは、暦の上では秋ですが、実際には冬のような冷え込みを感じる日もあります。朝の気温が1℃まで下がり、同僚から「マフラーを着用すると温かいよ」と助言されるほどでした。しかし日中になると気温は20℃近くまで上がり、半袖姿の人も見かけます。寒暖差の大きさが体にこたえ、季節の移ろいを肌で感じる毎日です。

・5月には二つの祝日がありました。5月1日の労働者の日、そして25日の「5月革命記念日」です。1810年の5月25日、スペイン植民地としての支配者が辞任し、アルゼンチン自治政府が樹立されました。独立への第一歩であり、6年後の1816年7月9日の独立宣言へと繋がる重要な出来事です。アルゼンチンでは記念日を通りや建物の名前にする習慣があり、私の住むサンティアゴ・デル・エステロにも「5月25日通り」と「7月9日通り」があります。日付が街の風景に刻まれることで、記念日やその由来を自然に覚えられるのは興味深く、日本でも取り入れると良いのではと感じました。

・記念日当日は、市の中心広場で交通規制が敷かれ、州知事や市長をはじめ行政のトップが参加する大規模なセレモニーが行われました。日本のような式次第はなく、州知事の宣言、市長のスピーチ、そして憲兵や警察、学校関係者による集団行進が続きました。特に印象に残ったのは市長のスピーチで、「連邦主義の始まり」という言葉です。5月革命を契機に、ブエノスアイレスの中央集権派と地方の自治を主張する連邦主義派が対立し、現在のアルゼンチンで州ごとに憲法が存在する背景には、この216年前の革命があることを知りました。

5月革命記念日のセレモニー



ワールドカップ@近所の野菜屋



・前々月は「アルゼンチンの良いところ10選」、先月は「日本の良いところ10選」をまとめました。両国にそれぞれ魅力がある中で、「では、アルゼンチン人と日本人、どちらが幸せなのだろう？」と漠然と考えていたところ、国連が毎年発表する「世界幸福度調査報告2026年版」に出会いました。もちろん、幸せの感じ方は人それぞれであり、国単位で比較することにあまり意味はないとも思います。しかしランキングという形で示されると、つい見てしまいます。2026年版では、アルゼンチンが44位、日本は61位でした。順位の上下に一喜一憂するよりも、日々の暮らしの中で自分が何に幸せを感じるのかを見つめ直すことの方が大切だと思います。

【世界幸福度調査報告2026年版の一部抜粋】

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
44位 アルゼンチン	6.430	-0.132	60	36	51	49	42	92	100	31
61位 日本	6.130	0.066	40	44	28	2	85	123	29	79

備考：①を基準にランキング。①ライフ評価（3年平均） ②変化（2012年以降） ③不平等 ④社会的支援 ⑤一人当たりGDP ⑥健康寿命 ⑦自由度 ⑧寛大さ ⑨腐敗に対する認識 ⑩ポジティブな感情
(注：統計上、例えば、一人当たりのGDPは日本の方が高く、健康寿命も日本の方が長い。)

・とはいえ、私は、アルゼンチンの地域社会に貢献、大げさに言えば、アルゼンチンの人々が少しでも幸福になる為に、日本からアルゼンチンに派遣されていることもあって、このランキングは意外な感じがします。幸せの感じ方は人さまざまであり、どの尺度を採用するかによって順位は大きく変わることを承知しつつも、日常生活を過ごす中で、治安の良さ、貧困や貧富の格差、安定した物価、モノやサービスの品質、社会インフラや公共交通機関、歴史に育まれた文化、バリエーション豊かな食生活、街の清潔さ——どれをとっても日本の方が優れていると感じていたからです。

・しかし一方で、「アルゼンチンの方が幸せなのかもしれない」と思う瞬間もあります。例えば、職場で行われる誕生日会。誕生日は最重要日のひとつで、事務所の壁には誕生日一覧表が貼られています。皆で歌を歌い、ケーキの火を吹き消して祝う場には、皆笑顔にあふれていました。日本では小学生の頃を最後に誕生日会を経験したことがなく、ましてや勤務時間中に会社で祝うことなど考えられません。しかし、仲間から祝福される体験は、心に温かさをもたらすものです。

・また、こちらの人々は「perfecto」という言葉をよく使います。形容詞としては「完璧な」という意味ですが、日常会話では「そうだ」「OK」といった軽やかなニュアンスで用いられます。日本やドイツのように「完璧」を厳密に追求する文化とは異なり、アルゼンチンでは日常の小さなことでも満足し、幸せを感じる素地が言語の中に息づいているように思えます。

・さらに、図書館での出来事も印象的でした。顔なじみの職員が休んでいたため、同僚に理由を尋ねると、「忘れて休んでいる」でした。日本では「気分が乗らない」という理由で休むことはなく、無理して出勤するか、有給休暇を調整して使うのが一般的です。しかし、正直な理由で休める環境は、人間らしい幸せを支えるものだと感じました。

・そんな私でも、タイを訪れたときには肩の力がふっと抜ける感覚を覚えます。日本では常に時間を守り、失敗を避け、人に迷惑をかけないようにと気を張り続けます。それは仕事を効率的に進める為には必要ですが、行き過ぎれば「過労死」という言葉を生む社会にもなります。今は日本人の協力隊員としてアルゼンチンにいるので緊張感を保っていますが、個人として再訪すれば、もっと肩の力を抜いて過ごせるだろうと思います。

・では、このように「その場を楽しむ」「いい加減さが許容される」社会はどのように形成されたのでしょうか。私は、イタリアやスペインなどラテン系の国民性を基盤に、教育が「自己肯定感」を育ててきたからだと考えます。通勤途中に通る幼稚園の前には毎日変わる標語が掲げられており、「自分を大切に」「あなたなら何でもできる。」「あなたは素晴らしい」「自分を疑わない」といった自己肯定を促す言葉が並んでいます。私が勤務していた日本の企業では「(自己否定から)自己変革へ」「変わることは善」「現状維持は悪」という価値観で国際競争力を強化していましたが、幸せを主観的に感じるためには自己肯定感が必要だと気づかされます。

・自己肯定感には国際競争力にはマイナスかもしれませんが、人々の幸福感にはプラスに働きます。そのバランスが、今のアルゼンチンの社会状況や幸福度調査の結果に表れているのでしょうか。とはいえ、アルゼンチンサッカーには国際競争力が大いにあり、そこにまた別の魅力と可能性を感じます。幸福の形は一つではなく、社会のあり方や文化の違いがそれぞれの幸せを形づくっているのだと思います。

毎日更新される標語@近所の幼稚園前



(スペイン語版を同時配信)

誕生日カレンダー@事務所



鈴木功二